

世界の記憶にふれる

みんなく收藏品と研究者のまなざし

1970年大阪万博の跡地、

万博記念公園にある

国立民族学博物館(みんぱく)。

1974年創設以来、世界各地の文化を

物語る膨大な收藏品を蓄積してきた。

そのなかから毎回一品を取り上げ、

収集の背景や研究者の思いを通して、

世界の多様な文化に迫る。

ク ラカヌーは、今年9月から
始まる特別展「*1」で、み

んぱく約50年の歴史上、初めて公

開される資料だ。収集されたのは

1984年、全長10mを超える大

きさということもあり、これまで

展示されることなく収集時の梱包

のまま収蔵庫の中で眠っていた。

参与観察「*2」によるフィール

ドワークを基礎とする文化人類学

の出発点となったのが、1910

年代におこなわれたマリノフス

キー「*3」によるパプアニューギ

ニア島嶼部での調査だ。この調査

が島と島の間でおこなわれる財貨



クラカヌー(パプアニューギニア):文化人類学の出発点



新たに制作した帆は、島の50代以上の人々が子どもの頃の記憶を頼りに3日間で完成させた。撮影/門馬一平

(腕輪や首飾り)の交易(クラカヌー)が財
の交換だけでなく、島と島を結び
つける儀礼的な制度であることを
明らかにした。この交易に使われ
るのがクラカヌーだ。

収集された1980年代、帆で
走る航海カヌーを日常的に使って
いる地域は、太平洋でも数少なく
なっていた。木造の舟がFRP「*4」
などの新しい素材に入れ替わって
いくなかで、伝統技術を伝える貴
重な資料として収集された。みん
ぱくが世界各地の物質文化の収集
に力を注いでいた時期でもあった
という。

人はなぜ海を渡るのかという
テーマで研究する小野林太郎さん
にとって、伝統的な材料を使って
建造され、今も現役で活躍するク
ラカヌーは舟と人類の歴史を考え
るうえで象徴的なものだという。

そんな貴重な資料でありながら、
長年収蔵庫で眠っていたこのクラ

カヌー。その本来の姿を再現する
ため、帆を艤装することになった。
しかし、カヌーと一緒に収集され
ていたパングダナスの葉を縫い合わ
せた帆は傷みがひどく展示に耐え
られるものではなかった。そこで、
門馬一平さんが現地に赴き、当時
の技術で新たに作ってもらった。
現地では40年前にカヌーを手放し
た人の家族から、その代金で屋根
を葺き替え、子どもたちの教育費
にあてることができた、今でも感
謝していると伝えられたそうだ。
40年の時を経て蘇ったクラカ
ヌーは、島々を結ぶ交易の記憶と
ともに、人類と海との深いかわ
りを私たちに語りかけている。



クラカヌーの後ろにたつ小野林太郎教授(右)と門馬一平特任助教(左)

注

*1 特別展「舟と人類—アジア・オセアニアの海
の暮らし」(2025年9月4日〜12月9日)

*2 調査者が異文化社会に入り込み、共に生活
しながら観察・資料収集を行う研究方法。

*3 イギリスの人類学者。参与観察の方法論を
確立した。

*4 繊維強化プラスチック